

“奴” 含む新語から中国社会の現状をみる

戦 慶 勝

1 はじめに

21世紀に入って、中国語には新しい表現が数多く生まれた。これらの新しい表現の中に中国社会の現状や中国人の新しい価値観を映し出すものが多く含まれている。例えば、“奴” [nú] という形態素を含んだ“房奴”“卡奴”“车奴”“孩奴”“班奴”といった表現は現代中国社会の現状をリアルに映し出したものであり、また中国人の新しい価値観や社会の新しい変化に対する態度をリアルに反映したものである。

言語コミュニケーションを社会の現状や文化の持つ価値観との関連でみるアプローチはことばと社会現象が互いにどのように影響し合っているかを明らかにすることに資するかもしれない。本稿は“奴”という形態素を含んだ“房奴”“卡奴”“车奴”“孩奴”“班奴”に焦点をあてて、これらの新語を通じて、中国社会の一側面を観察し、それらの表現の背後に潜んでいる社会的要因、文化的要因を明らかにすることを目的とする。

2 “奴”の意味範疇

現代中国語では“奴” [nú]¹ といえば、“奴隶”“奴役”“奴才”のように形態素として二音節語を構成するのが普通であるが、歴史的にみて、“奴”は一音節語として使われるのが普通であった。用例に基づいて中国語における“奴”の品詞をみると、名詞や動詞として使われることがあり、また、形態素として使われることもある。本稿でとらえる“房奴”“卡奴”“车奴”“孩奴”“班奴”などにおける“奴”は形態素として認められる。

本稿は“奴”の語源を史的言語学の方法により追求するものではないので、その成立の由来や現在までの意味の変化すべてを追及しない。しかし、“奴”を含む新語の意味特徴や存在意

キーワード：奴，価値観，社会現象，メンツ文化

¹ “奴”の字義について、《说文解字》では“奴婢皆古之罪人也”（奴婢は古代でいずれも罪人を表す）のように解釈されている。

義、及びその意義の深さを示す必要がある。“奴”は名詞として使われる場合、三つの解釈が可能である。①自由や権利が剥奪され、他人の私有財産として他人のために無償で働かなければならない人を指す。②人を卑しめて言う場合に使う表現である。③自分をへりくだって言う表現である。

まず、①の意味について述べる。《周礼・秋官・司厉》の中に“其奴，男子入于罪隶，女子入于舂槁。”（それらの奴隷は、男性なら労役に従う罪人とされ、女性なら米を搗く使用人とされる）のような表現がみられる。漢時代の鄭玄(A.D.127~200)は、その中の“奴”について、“奴，从坐而没入县官者，男女同名。”（ここの「奴」は連座して役所の所有物となった者である。男と女の両方を指す）のように解釈している。さらに、《史记・季布栾布列传》の中に“而布为人所掠卖，为奴于燕。”（ところが、季布は強引に連行されて売られ、奴隷として燕国で暮らすことになった）のような表現もある。“其奴，男子入于罪隶，女子入于舂槁。”と“而布为人所掠卖，为奴于燕。”の中の“奴”は、自由や権利を奪われた「奴隷」のことを指していると考えられる。

②の「人を卑しめて言う」という意味については、《后汉书・逸民传・严光》の中の“帝笑曰：‘狂奴故态也。’”（皇帝は笑っているが「狂気じみたやつがわざと演じた態度だ」と言った）のような表現によって裏付けられる。また《晋书・刘曜载记》にも“叛逆胡奴！要当生缚此奴，然后斩刘贡。”（叛逆の野蛮人！そのやつを生け捕りにしなければならない。生け捕った後、劉貢を殺す）のような表現がある。これらの文における“奴”は人を卑しめる差別表現にほかならない。

③の意味を表す“奴”は相手を敬って自分を控えめにする場合に用いられ、いわゆる謙讓表現としてとらえられる。謙讓表現としての“奴”は《敦煌变文集・王昭君变文》の“异方歌乐，不解奴愁。”（異国の歌と音楽はわたくしの寂しさと悲しみを慰めることができない）のように、第一人称代名詞として用いられる。同じ意味・用法として《宋史・忠义传六・陆秀夫》にもみられる。“杨太妃垂帘，与群臣语，犹自称奴。”（楊太妃は院政を敷いたにもかかわらず、大臣たちと話す場合、引き続き「奴」を使って自分のことを言うのである）における“奴”も第一人称代名詞として自分をへりくだって言うものである。“奴”は最初は男性の自称としても用いられていたが、その後、女性専用の自称になった。

“奴”は動詞として使う場合、人を奴隷になるように仕向ける、または人を奴隷のようにこき使うという意味を表す。《新唐书・忠义传上・吴保安》に“仲翔为蛮所奴，三逃三获。”（仲翔は南蛮人の奴隷とされた。三回逃げたが、三回とも捕まった）のような表現がある。文中の“奴”は「人を奴隷になるように仕向ける」という意味を表す動詞である。また、《清史稿・太宗纪一》の“彼既屠我归顺良民，又奴其妻子耶。”（彼らは支配に服した民を殺しただけでなく、その妻と子どもを奴隷のようにこき使っている）という文における“奴”は「人を奴隷のようにこき使う」という意味を表す動詞としてとらえられる。

“奴”は“房奴”“卡奴”“车奴”“孩奴”“班奴”のように、形態素として使うのはごく最近のことだろう。“房奴”“卡奴”“车奴”“孩奴”“班奴”は人間を指していることには間違いはないが、単語全体がそのような意味を担っているわけではない。人間を指し示すはたらきは後置の“奴”によって担われているのである。つまり、前置形態素としての“房”“卡”“车”“孩”“班”が後置形態素としての“奴”の意味を限定したり詳しくしたりするという意味・機能を担い、後置形態素としての“奴”が自由を束縛される“奴隷”の意味を引き合いに思うままに行動することのできない人の窮地を描き出す比喩的表現である。

情報伝達の適切さを維持するためには、さまざまな表現の中から、その場にふさわしいものを選ばなければならない。第二言語による異文化コミュニケーションの場合もけっして例外ではない。新しい表現としての“房奴”“卡奴”“车奴”“孩奴”“班奴”は中国の世相の変化や中国人の価値観の変化を表している。これらの新語の中身を適確に把握し、適切に使いこなせることは情報伝達の厳密化につながる。さらに、異文化コミュニケーションの観点からみても、ことばの表現を世相の変化との関連においてとらえていこうということは、多極的な社会構造や重層的な精神構造から基礎的なパターンを抽出して新たな研究視座を構築することにつながるのである。

3 “房奴”

新語は消え去りゆくものもあれば、意外と生命力豊かなものもある。新語が着目に値するのは、過去から連綿として続いた自然な言語変化を身近な現象として観察できるからである。“房奴”は1990年代の後半に生まれた表現である。1998年の住宅制度改革の実施によって、福利的住宅分配制度が廃止された。それに伴い、住宅は個人の財産として売買ができるようになり、住宅市場が形成された。急速のニーズの拡大によって住宅価格が上昇し、住宅ローンの金利も急上昇した。そのため、住宅ローンを組んで家を購入した人々はローン返済に苦しんでいて身動きがとれなくなった。“房奴”という表現は、このような状況に乗ってネット表現として現れたのである。

“房奴”における“房”は「住宅」の意味で、“奴”は「奴隷」のように銀行にこき使われる人の意味としてとらえられる。2011年8月、商務印書館出版の《新华字典》(第11版)に“房奴”が新語として収録された。形態素としての“奴”の意味については、“为了支付贷款等而不得不拼命工作的人”(ローン返済のために一生懸命に仕事をしなければならない人)のように説明されている。このような説明は第2節で述べた、名詞として使われる場合の“奴”の意味と合致している。また、こここの“不得不”は「しなければならない」「せざるをえない」という意味を表し、“拼命”は「必死でやる」「命がけでやる」という意味を表している。居住環境の改善を図って住宅ローンを組んで家を買ったあげく、ローン返済のために人生を送らなければ

ならないという窮地に陥ってしまった人々のことを喩えて言うのである。《新华字典》の解釈からも“房奴”という社会現象の深刻さをうかがい知ることができる。

“房奴”という現象の原因は中国人の横並び意識やメンツを重んじる文化に求められるが、住宅価格の上昇、金利の上昇も拍車をかけている。周りの人が住宅ローンを組んで家を買ったので、自分もそれに倣いたいという潜在意識がどこかで働いているようである。メンツを重んじることの根底には相手をライバルとしてみるという対抗意識が潜んでいると思われる。

日本人も横並び意識が強いと指摘されているが、中国人の横並び意識とは性格が異なっている。他人と同じ行動をとるという点においては、両者に間に共通点がみられるが、それぞれの導いた結果が相違している。日本人の横並び意識は協調性を重んじるという結果を生み出しているのに対して、中国人の横並び意識は負けず嫌い、常に相手と張り合うというライバル意識を生み出しているのである。

福利的住宅分配制度が廃止されて以来、一部の人は人生の幸福を住宅面積と結びつけて考えるようになった。一部の若者は自分の収入を顧みず常に上のものと張り合っているようである。結婚するにあたって、競って見栄えをはるという風潮が社会問題にもなりつつある。互いに張り合った結果、住宅ローンで首が回らなくなってしまった。つまり、豪邸を手に入れることができたが、住宅ローンによる負担増で幸福指数が逆に下がってしまったのである²。

《新华字典》(第11版)が“房奴”を新語として収録したことは中国社会への警鐘としてとらえられる。“房奴”という現象の影響は住宅市場に限らず、社会全体にも及ぼしているのである。一部の人は無理をして住宅ローンを組んで家を購入したため、夫婦の年収の40%、ひいては半分以上をローン返済に充てなければならない。その結果、家庭消費がけずられ、生活の質は落ちてしまうのである。

国際基準では住宅ローンの返済額が年収の1/3を占めていれば、返済不能のリスクを伴うというのである。この基準に基づいて考えたら、年収の40%以上をローン返済に充てるということはリスクが高いと言わざるをえない。つまり、生活費を切り詰めても、返済不能に陥る可能性が高いのである。特に中国は発展途上の段階にあるので、住宅ローンの返済額が年収の30%を超えても普通のサラリーマンにとって重い負担となるのだろう。

ローン返済者の負担が重いということについては、もう一つの原因がある。それは金利の上昇である。固定金利ではないので、金利の上昇に伴い、返済者の負担が増加する一方である。住宅価格の上昇と金利の上昇は二重負担となり、その結果、「泣き面に蜂」という局面に差し掛かってしまうのである。ローン返済額があまりにも大きいので、それに伴い“負翁”という

² 2012年、不動産大手の「链家地产」の調査によると、2011年の北京市の住宅ローン返済平均額は7,281元(約14万円)で、2009年の2,803元と比べて、160%増えてしまった。7,281元のローン返済額は北京市統計局が発表した2012年のサラリーマンの一人当たりの平均月収(5,223元)をはるかに上回っている。つまり、夫婦月収の半分以上がローン返済に充てなければならないのである。

しやれ言葉が生まれた³。“負翁”となった“房奴”は金利の変動にもっとも敏感である。

消費者自身の責任のほかに、銀行、不動産業者も責任を逃れられない。銀行はリスク意識が薄く、審査基準が甘い。マイホームを持ちたい、立派な家を持ちたいという消費者の心理を利用して、目先の利益のために、どんどん金を貸し出してしまうのである。不動産業者は情報操作をしたりして、強引な手段で購入を勧めるのである。最近、悪質な勧誘に規制がかかるようになったが、不動産市場は利益が高いので、悪質な勧誘は後を絶たない。

4 “卡奴”

“卡奴”は“卡債族”とも呼ばれる。“卡”はカードの意味で、単独で使う場合はクレジットカードやキャッシュカードを指すことが多い。“卡奴”という表現は最初、台湾に生まれた。クレジットカードの返済地獄に陥った人を嘲笑したり自分の失敗をあざけったりする場合に用いられる。クレジットカードのキャッシング・リボ払いでの借金が膨れ、借金返済のために、借りては返し、返しては借りるという自転車操業の状態で苦しんでいるのが“卡奴”の共通した特徴である。

“卡奴”の根本的な原因は銀行がクレジットカードを乱発していることにありと思われる。銀行間の競争が激しくなった今、客層を確保するために、各銀行では審査基準を甘くして発行手続きも簡単にしている。クレジットカードの申請にあたり、身分証明書しか提示しなくてよい。その結果、返済能力のない人でも簡単にクレジットカードを手に入れることができるようになった。さらに、客層を獲得するため、支出超過をしても、毎月の返済額が支出超過分の2%でもかまわないようにされている。つまり、支出超過分が1万元の場合は、毎月200元しか返済しなくてもかまわないのである。そのため、利用者が警戒心を緩めてしまい、知らぬ間に借金が膨らんでしまうのである。

“卡奴”という現象は消費意欲の高い若者に集中している。上海周辺の大学は銀行間の激戦地となっている。各銀行が大学の周辺で看板を立てて自社のクレジットカードをアピールする光景がよくみられる。しかし、銀行はクレジットカードのメリットばかり紹介するが、留意点などについては、ほとんど触れない。契約書に注意事項などが書かれているとはいえ、難解で内容がはっきりと理解できない。

今の30代以下の人是一人っ子が多い。そのことも支出超過に拍車をかけている。甘やかされて育ったため、自己管理能力が低く、収入に合わせて支出を決めるという意識が薄いようだ。銀行の“花明天的钱圆今天的梦”（明日のお金を使って、今日のゆめを実現しましょう）という宣伝スローガンで心を迷わせて、カードローンを利用して車を買ったり、ブランド品を買っ

³ “負翁”は収支がマイナスという意味であり、“富翁”は金持ちの意味である。両者は発音が同じであるが、まったく反対の意味を表している。“負翁”はしやれ言葉として使われている。

たりするのである。

若者の間では、学生を含めてクレジットカードを持っていなければ、カードで支払うことができなければ、流行遅れになるという意識があるようだ。これも中国人のライバル意識の表れだろう。クレジットカードとiphone電話を持つことは時代の気風としてとらえられているようである。今や自分のiphoneに商品名と自分のカード番号を入力すれば、簡単にショッピングすることができる便利な時代になった。しかし、一部の若者にとっては、その便利さが落とし穴になる恐れがある。所得以上のものを消費しかねないからである。

“卡奴”となった人たちは収入が支出に追いつかないがために、複数の銀行でクレジットカードを申請し甲銀行から借りて乙銀行に返すという一時しのぎの手段をとらざるをえない。つまり、新しいカードをつくり、古いカードの借金を返済して暮らしをつながなければならない。借金がどんどん膨らんだ結果、ローン返済のために稼ぐことになり、幸福指数が下がっても当然のことである。極端の場合は犯罪に走ることもあるようである。

“卡奴”がどんどん増えていることの原因は、銀行の審査基準が甘いことと、若者が衝動的に消費する傾向に求められるが、中国のメンツ文化もからんでいることが否めない。体面を傷つけることを恐れているあまり、自分を実質以上に見せようという心理がどこかで働いてしまうのである。この点においては“房奴”の心理とまったく同じである。メンツ文化が育んだ虚栄心は銀行の利益をもたらし、中国経済の繁栄に貢献する一方、ローンの返済で家計が苦しくなり、自縄自縛という結果をもたらし、最終的には正常な生活ができなくなったのである。

5 “车奴”

2007年、中国の教育省は171の新語を発表した。その中に“车奴”という表現が含まれている。2000年に入って、中国はマイカーブームを迎えた。マイカーの購入にあたって、理性的な判断に従って車種を選ぶ人もいれば、盲目的に選ぶ人もいる。“车奴”は無理して車を買う人のことを指す表現である。しかし、“房奴”“卡奴”と異なって、“车奴”は必ずしもマイナスの意味を表しているとは限らない。むしろそれが一部の人々のライフスタイルを描き出しているのである。

“车奴”となった人は大方2つのタイプに分けられる。一つは「手元不如意タイプ」であり、もう一つは「車に夢中となるタイプ」である。前者は車の購入によって生活が不自由になった“车奴”を指し、後者は車に心を奪われ、われを忘れた“车奴”を指している。「手元不如意タイプ」の“车奴”は他人の迷惑にならないのに対して、「車に夢中となるタイプ」の“车奴”は場合によっては他人や社会に迷惑をかけることがある。

深く考えずに軽々しく車を買った“车奴”は「手元不如意タイプ」に属する。このタイプの“车奴”は生活の質を重要視している。しかし、軽はずみな傾向がある。具体的にいえば、マ

イカーを運転したあと、はじめてガソリン代が高い、駐車料金も高い、自動車保険を買わなければならない、点検や車検は金がかかる、ローン返済は骨が折れる、といったことに気付くのである。

都市部の住宅価格の上昇によって、市内に住むことはますます難しくなってきた。職場から離れたところに住まなければならないため、交通手段としての自家用車が必要となってきた。一部の人は収入が少ないので、現段階では車を買うべきではない。或いはもっと安い車を買うべきである。しかし、「手元不如意タイプ」の“車奴”は自分の所得にかまわず、周りとは張り合うというライバル意識の影響で念入りに検討せずに車を買ってしまう、或いは衝動的に高い車を買ってしまうのである。

中国の自動車ローンは住宅ローンと同様に、基本的には金利変動型である。そのため、「手元不如意タイプ」の“車奴”は常に銀行の金利変動に神経をとがらせている。また、ガソリン価格の高騰にも敏感に反応するのである。車を購入するまで、金利の上昇やガソリンの高騰といった要件を計算に入れなかったため、車を保有するためには、生活費を切り詰めるしかない。まさに横並び意識の作用によって正常な生活を奪われたのである。

「手元不如意タイプ」の“車奴”は懐具合が悪いため、なるべく車のメンテナンスに金を使わない。洗車は自分の手でやったり点検を遅らせたりして、できるだけ金がかからないように工夫する。それと対照的に、「車に夢中となるタイプ」の“車奴”は車のメンテナンスのためなら、いくら金をつぎ込んでも惜しまない。それどころか、ほぼすべての余暇を車の保全維持に傾けているのである。

「車に夢中となるタイプ」の“車奴”は愛車を大事にする点においては「手元不如意タイプ」の“車奴”と同じであるが、車に熱中するあまり、時々われを忘れて周りの人や社会に迷惑をかけるという点においては「手元不如意タイプ」の“車奴”とまたずれている。例えば、ルールを無視して暴走したり法律に反して車を改造したりして車を愛する状態が正常ではない。車の束縛から抜け出ることができないから、仕事を疎かにする傾向がある。

北京では無我夢中で環状線を暴走する“車奴”のことを“二环十三郎”と呼ばれている。この“二环”は北京の第二環状線のことで、“十三郎”は愚か者の意味である。“二环十三郎”とは制限速度が80キロの第二環状線を160キロで走って、事故を起こして命を落とす一部の若者を指している表現である。車に心を奪われ他をかえりみない。このような“車奴”は迷惑的な存在である。

6 “孩奴”

1979年から2014年までの35年間、中国では一人っ子政策が実施されていた。そのため、現在の多くの中国の家庭は子供1人、親2人、祖父母4人という構図となっている。いわば、子供

1人が6人の大人に囲まれているのである。子どもを大切に扱っているがゆえに、親が知らぬ間に子どものことにしばりつけられて、自分の人生を満喫することができなくなったのである。“孩奴”という表現は、大事な一人の子どものためなら、いかなる代価を惜しまない30代～60代の親を指している。

今の50代、60代の人々はほとんど大学の教育を受けていない。彼らの人生で心残りがあるとするれば、高校を出た後、大学に入って教育を受けられなかったことだろう。自分の果たさぬ志を実現させるために、子どもの教育に多くの時間を割いて多くの金銭をつぎ込んだ。彼らは自分の人生を楽しむのではなく、子どもの将来のために毎日を送っていると言っても過言ではない。

21世紀になって、一人っ子政策が実施され始めたころの一人っ子たちは社会の中堅となり、結婚して子育てをする時期を迎えている。中国経済は順調に右肩上がりの成長を続けているが、それと同時に、物価も右肩上がりで上昇を続けている。物価の上昇は一般庶民の家計を圧迫している。とくに医療費、教育費の高騰で国民の不満や怒りが高まっている。

今の30代、40代の人たちは競争の激化、物価の高騰といった苦境に直面している。高い医療費、高い教育費に備え、彼らは懸命に働き、懸命に金を稼いでいる。しかし、それはけっして自分のためではなく、大事な一人っ子のためである。つまり、自分の現在よりも子どもの将来のほうが優先されているのである。“孩奴”という表現は、まさに今日の30代、40代の人たちのありさまである。

本来ならば、物価上昇の影響で、生活が困難となる若年層に対する歪み是正策として、社会保障制度を充実強化しなければならない。しかし、社会保障制度が十分に整備されていないので、国民が安心して暮らせる環境にはまだ達していない。2014年、35年間実施され続けた一人っ子政策が見直されたが、政府の予想と裏腹に第二子を産む人は意外と少ない。第二子を育てる余裕はないことが主な原因として挙げられている。最近では自分の仕事に価値を見出し、自分の人生を楽しむディンクス夫婦が増加している。これも社会保障制度の現状と関係がないとは言いきれない。

“孩奴”となった人の中に子育ては単に金銭的な問題だと勘違いしている人が少なくないようだ。このことは子どものために買い物をする場合の振る舞いをみても一目瞭然である。例えば、経済的な商品があるにもかかわらず、わざわざ高い商品を選ぶ。とくに教育費になると、いくら金がかかってもかまわない。一部のメーカーは子どもの出世を願う親の気持ちを汲み取って、いろいろな高価な商品を開発し、ほろ儲けしている。“孩奴”たちの高価商品志向をうまく利用しているのである。出費がかさむので、子育ての負担が多くの親にのしかかっている。

多くの“孩奴”は我が子の消費を保つために、金儲けにどんどん時間をかけている。その結果、金は増えたが、子どもと付き合う時間が減り、親と子どもを結ぶきずなが弱くなってし

まった。しかし、家族を結ぶきずなは単純に物質的に満足させることだけではない。子育ては物質の面と精神の面を両立させなければならない。メンタル面の配慮の軽視はいずれ禍根を残すのである。

中国の義務教育は日本と同様、学区制である。自治体が学区を定め、児童・生徒を戸籍所在地の学校に通わせることになっているので、越境通学は安易に認められない。特定の学校に入学希望者が殺到し、義務教育において学校間の格差が生じることを防ぐためである。しかし、自分の子どもを有名校に入れようとして、有名校のある学区に住民票を移し、越境入学させるケースが一部の地方で増えている。特に大都會ではそのような動きが顕著である。

住民票を移すためには、新しい住所を持っていなければならない。そこで、一部の“孩奴”は我が子を有名校に入学させるために、有名校のある学区で“学区房”（有名校周辺のマンション）を買うのである。しかし、有名校のある学区の住宅地はほとんど一等地で、そこに建ったマンションは投機的取引で価格が高騰したので、一般のサラリーマンには簡単に買えるものではない。子どもの出世を願って借金までして“学区房”を買ってしまった人は、ローン返済が新しい負担となっているため、結局“孩奴”であると同時に、新たな“房奴”となってしまうのである。

7 “班奴”

多くの30代、40代の人は“房奴”“車奴”“孩奴”となり、住宅ローン返済、自動車ローン返済、子どもの教育といったことで頭を悩まされている。それと同時に、多くの小・中学生が大学や高校への進学受験のために、一生懸命にもがいている。一流の大学や良い高校に進学するために、いろいろな進学塾や進学クラスで勉強に励んでいる子どものことは“班奴”と呼ばれている。“班奴”における“班”は進学塾や進学クラスのことである。

科学の伝統を持つ中国は、日本とは比べものにならないほどの超学歴社会である。名門大学を出ていなければ、或いは高学歴を持っていなければ、良い就職はありえない。名門大学を出ている人とそうでない人の初任給が倍以上に違うことはけっして珍しい現象ではない。つまり、学歴が高ければ高いほど、収入の良い職業、尊敬される社会地位、他人から羨望される人生などを手に入れる確率が高いのだ。そのような社会的背景で、子供の出世を願う大人は学校の正常なカリキュラムのほか、放課後や休日、または夏休み期間中、冬休み期間中を利用して、子供を様々な補習クラスに通わせるのである。

進学塾や進学クラスでは教科書の学習だけではなく、書道や楽器なども学ばなければならない。多くの子どもにとって、大学に入るための準備はすでに幼稚園のときから始まっているのである。多くの親にとって、子供により多くの技能を持たせておくことは、教育条件がよりよい高校、もしくは大学に入るための下準備となる。高校入試、大学入試の場合、特技のある学

生なら点数が足されるからである。しかし、このような詰め込み主義の教育は子どもへの配慮が足りないので、児童や生徒に過重な負担をもたらしている。

放課後や休日も進学塾、または進学クラスに通わなければならないので、子どもの自由時間が奪われている。特に大都会では小・中学生の学習負担が重過ぎることが問題になっている。進学塾、進学クラスはまた“校外校”とも呼ばれている。“校外校”に通う子どもは夜遅くまで勉強しなければならないので、昼の正常授業で集中ができなくなり、成績が逆に下がるケースもある。

子どもは学習負担が重いので、当然のことながら、課外活動の時間や運動の時間が減り、健康状態が悪くなっている。2012年3月29日、中国教育科学研究院は《我国青少年体质健康发展报告》という報告書⁴を発表した。それによると、毎日0.5時間の運動時間を確保できる小・中学生は42%であり、40%の小・中学生は0.5時間の運動時間を確保することができない状態である。その結果、視力低下や肥満や血圧不良の子どもが増えたというのである。

“校外校”に通う子どもは学習の疲れを口にするが、思いがけないことに、大人も愚痴を言うのである。周りや張り合う意識の強い大人は自分の子供が教育レベルの高い学校に入って学習することを望んでいるがために、情報収集に腐心している。同僚の子どもや近所の子どもがどんな進学塾に通っているかを注視しつつそれと似通った選択をするのである。いろいろなコースを申し込んだ結果、金銭面はもちろんのこと、時間の面や体力の面でも負担が重くなっている。

例えば、夏休み期間中や冬休み期間中に子どもを国語、算数、英語、美術、書道、ピアノなどのクラスに入れた場合、金がかかることはいうまでもないが、親が仕事を休んで子どもを連れて行かなければならないので、コストはけっして安くない。どうしても親が仕事を休めない場合は祖父母の出番となる。

国語、算数、英語、美術、書道、ピアノといったクラスは一カ所に集中していれば、少し楽かもしれないが、数カ所に分散していれば、学校間を行き来しなければならないので、子どもも大人も苦勞するのである。

金がかかる例として、夏休みや冬休み期間中の進学塾の授業料は安いものでも1万元、高いものなら3万元もするのである。文系大学の年間学費はほとんど1万元以下なので、それと比べてみれば、進学塾の授業料の高さにあきれるだろう。コース別の授業もけっして安くはない。夏休みと冬休み期間中のコースなら1コースの金額は大体800元からするが、業者がいろいろな名目を立てて、高い料金を徴収するのである。「興味・関心を呼び起こすクラス」「名教師が教えるクラス」「エリートクラス」になると、費用は2,000元からするのが普通である⁵。

もちろん子ども自身の意志によって進学塾や進学クラスで勉強するケースも少なくない。し

⁴ 中国教育科学研究院《我国青少年体质健康发展报告》(2012年3月29日)を参照。

⁵ 蔡玉高《“校外校”的背后：孩子成“班奴”，家长闹心》(《半月谈》2012年6月8日)を参照。

かし、親の一方的な願望で進学塾や進学クラスで勉強することであれば、金の無駄遣いになり、教育効果が望めず得られるものより損のほうが大きいだろう。“班奴”となった子どもは遊びの時間がほとんど奪われてしまったので、社会に進出して適応力が低い。“高分低能”（テストの点数は高いが、社会への適応力や問題処理能力が低い）という表現は正に今日の“班奴”のありさまだといえる。

“班奴”という現象は中国人の文化的価値観の産物であり、また受験教育という教育システムの産物でもある。つまり、“班奴”や“校外校”という歪な現象はこの二つの要因の相互作用の結果である。“校外校”という現象は無視することができないが、それより寧ろ中国人の意識改革、中国教育システムの改革が緊急の課題である。中国最高の立法機関である全国人民代表大会は小・中学生の学習負担を軽減しようとして、義務教育法を修正したが、問題解決には至っていない。

8 むすび

新しい現象は常に新しい表現を生み出し、新しい表現の存立する意義は世相の変化や価値観の変化をありのままに反映することにある。世相の変化や価値観の変化を比喩的に表現すれば、生き生きと描き出す効果をあげるので、聞き手の耳に入りやすい。“房奴”“卡奴”“车奴”“孩奴”“班奴”はいずれも具体的なイメージを伴っているのである。

新しい表現の登場はその言語集団の考え方やライフスタイルを反映するので、“房奴”“卡奴”“车奴”“孩奴”“班奴”は最近の中国人の考え方や関心の向けられる方向を表していると思われる。また中国人の関心の向けたところから、中国人の新しい価値観や新語登場の要因を読み取ることができる。“房奴”“卡奴”“车奴”“孩奴”“班奴”は“奴”のマイナスの意味にちなんで、苦境に陥っている人たちの無力感をリアルに描いていると同時に、現代中国社会の暗黒面もさらけ出しているのである。

異文化コミュニケーションや第二言語習得の観点からみれば、目標言語やその言語の背景的要素としての社会現象を単純化しない複眼的な研究が肝要である。異なった文化における新しい表現に触れると、それまでの自分の価値観や常識がうまく機能せず、コミュニケーション不全を引き起こしかねないからである。本稿のような研究は第二言語習得者と目標言語における新しい表現との距離を縮めることが可能であり、その応用として異文化コミュニケーションの円滑化を図ることも可能である。

参考文献

郭熙 (1999) 《中国社会语言学》 南开大学出版社

- 李杰明,李杰群(2000)《汉语流行口语》华语教育出版社
- 刘鸿模(2000)《词语流行风》广东旅游出版社
- (汉)许慎撰,(宋)徐铉校订《说文解字》上海世纪出版集团·上海教育出版社(2003)
- 徐安琪《孩子的经济成本:转型期的结构变化和优化》,青年研究,2004年12期
- 李淑娟,颜力钢(2006)《最新中国俚语》新世界出版社
- 晏清《“房奴”现象背后的思虑》,产权导刊,2006年第6期
- 夏中华主编(2007)《中国当代流行语全览》学林出版社
- 文汇新民联合报业集团新闻信息中心(2007)《中国流行语2007发布榜》文汇出版社
- 张汉,张登国《从社会心理学视角探讨中国城市“房奴”现象》,河北科技大学学报,2007年第2期
- 杜中明(2008)《新词酷》中国工人出版社
- 文汇新民联合报业集团(2009)《2009发布榜中国流行语》文汇出版社
- 李颖主编(2010)《09后热门》山西经济出版社
- 刘吉艳(2010)《汉语新词群研究》学林出版社
- 侯敏,周荐(2011)《2010汉语新词语》商务印书馆
- 中国教育科学研究院(2012)《我国青少年体质健康发展报告》
- 蔡玉高《“校外校”的背后:孩子成“班奴”,家长闹心》半月谈,2012年6月8日